

白鳥五句

笠原 蜻蛉子

399-8205 長野県安曇野市豊科 4766

白鳥

五句

笠原蜻蛉子

ひたと首伸びて白鳥北へ翔つ

白鳥は非常に家族的絆が深い一冬を
日本で過した白鳥が故郷シベリアへ帰る時が
来てリノダーを先頭に一家は北へ向うのだ

双^{もう}白鳥白星の夜は恋多かりき

降^ふつとくは星空の下をペアの白鳥が遊泳している
夫婦なのか恋のペアなのかとにかく夜の白鳥は
一段と白が艶やかでロマンチックな風情

白鳥へ中洲を送り村人ら

暴風の濁流で川の中洲がしばしば流失する
白鳥の安眠の場所提供のため村人が従って
中洲を感じる大変な作業が行はれる。

白鳥の羽撃ち合ひたる無垢の胸

白鳥が大きく羽はたき胸を激しく突き合はせまことが
ある喧嘩なのか喜びの交換なのか いやそれはい
あの真白な胸の内の純粋で無垢なる意見の
衝突なまは

衝突なまは

白鳥の発つを待つとも惜むとも

成田千空(蛇笏賞)

選評

俳誌萬緑選者

白鳥がさうさう北へ帰る季節やあゝ日突然
群を成して鳴きながら帰つてゆく二郡三郡と
帰つてゆく整然と列をなしてゆく白鳥ありか
五六羽の仲間だけで帰る白鳥もある。毎年の
ことながら白鳥の去来には別離のドラマがあり
新なる季節の告知でもある。「発つを待つとも
惜むとも」というフレーズは感情の屈折を伝へ
確かである。

(萬緑 平成六年七月号)

立原貞行(元曲学科所長、元長野県教育委員会)